

F/T13

FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

F/T13 公募プログラム F/T13 Emerging Artists Program

11.26 (Tue) - 12.7 (Sat)

シアターグリーン、アサヒ・アートスクエア
Theater Green, Asahi Art Square



Q&A

公募プログラムに参加する9名のアーティスト全員に、同じ質問を投げかけてみました。
バラエティに富んだ回答からそれぞれの“今”を想像してください。

(回答は公演日順)

- Q1. 今、はまっている「もの」「こと」を教えてください。
- Q2. F/T公募プログラムに期待することは？
- Q3. 影響を受けた人物は誰ですか。



© Roger Casas

ゴージャル・スジャータ [インド]

- A1. 次の作品に向けて、ファンタジー、現実、そして夢がもつメタファーの概念と、それを取り巻く哲学的なものや精神分析理論を研究しています。
- A2. アジアの舞台芸術の文脈のなかで作品が上演できることを楽しみにしています。
- A3. 10年以上ともに仕事をしてきた、師匠でもある振付家のパドミニ・チェターです。

→公演情報・プロフィール p.4

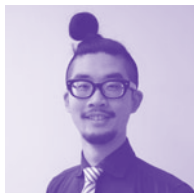


© Ichiko Uemoto

柴田聡子 [日本]

- A1. ゆべし(食べ物)
- A2. なるべくたくさんの方に、見て頂きたいです。
- A3. 岸部シロー、今まわりにいる方々

→公演情報・プロフィール p.4



益山貴司(劇団子供鉦人) [日本]

- A1. 散歩。これは、いつでも。
- A2. まずは選出して頂いて光栄です。
地方を拠点にしている子供鉦人にとって、東京、ひいてはアジアの人々に知ってもらい大きなきっかけになれば。
- A3. 両親。30を過ぎてから遺伝子レベルで顕著に影響を感じます。

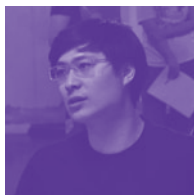
→公演情報・プロフィール p.5



市原佐都子(Q) [日本]

- A1. 今はないです。
- A2. 新しい観客が増えることを期待しています。あと、海外にもアピールできるかなって思っています。
- A3. 特別なこの人というのがわかりません。日々出会ってきた人たちにすこしずつです。

→公演情報・プロフィール p.6



© Shinehouse Theatre

ジョン・ボーユエン(シャインハウス・シアター) [台湾]

- A1. 人生そのもの。
- A2. 主催プログラムも楽しみです。芸術に携わる者にとって、世界中の才能ある人々と出会えることは素晴らしいことだと思います。
- A3. 「私の興味は、人がどう動くかではなく、何が人を動かすか」というピナ・バウシュの言葉に芸術家の魂の根幹のようなものを感じます。

→公演情報・プロフィール p.7

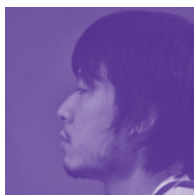


© Jirock Lee

ソ・ヨンラン [韓国]

- A1. 違う文化が混ざりあっている何かを見つけること。
- A2. 母国語の違う日本の観客が、私の作品をどう消化し、作品の持つ意味がどう変化していくのが楽しみです。
- A3. その時々で変わりますが、一貫して「悪い」作品を作る人に強い影響を受けていると思います。

→公演情報・プロフィール p.8



カゲヤマ気象台 (sons wo:) [日本]

- A1. ソウルミュージックと秋刀魚
- A2. まだ明確には語られていない、もやもやと潜在している問題をここから問うていくことができるとおもいます。
- A3. フィル・スペクターと稲垣足穂とブレヒト

→公演情報・プロフィール p.9



© Tara Tan

タン・タラ [シンガポール]

- A1. ハーバード大学の修士でデザインとテクノロジーを研究中で、「ネットワークと都市」をテーマにした論文を執筆しています。
- A2. アイデアを交わしたり、文化的な交流ができればと思っています。初めての日本公演なので、みなさんがどう感じてくれるのかも楽しみです。
- A3. 科学者から料理人まで、さまざまな人からインスピレーションを受けていますが、なんと言っても情報アーキテクチャである母と、映画好きで父の影響が大きいと思います。

→公演情報・プロフィール p.10



© Zhou Jing

ワン・チョン(薪伝実験劇団) [中国]

- A1. テクノロジーと世界の未来が気になりますが、自分自身についてもよく考えています。
- A2. 日本の観客と出会い、批評をもらうこと。
- A3. 中国だと林兆華、アメリカだとロバート・ウィルソン。日本なら鈴木忠志や太田省吾、平田オリザ、藤子不二雄などです。

→公演情報・プロフィール p.11



インド伝統舞踊と現代のはざままで。葛藤から見出された美
The language of movement: A dancer confronts her own image

ダンシング・ガール /
振付：ゴージャル・スジャータ
Dancing Girl /
Choreography: Sujata Goel

© Jesper Haynes

11.26 (Tue) - 11.27 (Wed) シアターグリーン BOX in BOX THEATER
Theater Green

『ダンシング・ガール』は自己のテーマを探るものです。パフォーマーは自己に内在する架空の人物を再構築します。臨床実験のように、芸術的な形式や習慣を超えた身振りに用いて、パフォーマーは自身の身体的および心理的な行動を解体するのです。作中で描かれるイメージは、壊れた人形から美しい人形へ、そしてダンスをする人形から、孤独な人形へと姿を変えて現れ、最後には消え去り、静止し、目に見えないものになります。この作品はつまり、ひとりのパフォーマーが自身のイメージを外側から見つめ直す試みなのです。

ゴージャル・スジャータ

ゴージャル・スジャータ：振付家、ダンサー [インド]

1979年アメリカ生まれ。インド古典舞踊・バラタナティムとコンテンポラリーダンスを学ぶ。2001年にインドの芸術大学を卒業し、04年までチェンナイを拠点に活動する振付家パドミニ・チェターのもとで活躍。その後、ベルギーのブリュッセルでコンテンポラリーダンスを学んだ後、ヨーロッパを拠点に活動。10年から12年にかけて、インドの芸術財団から助成を受け『ダンシング・ガール』を創作した。

振付・演出：ゴージャル・スジャータ / 衣裳：ズツシー・タバシール / 照明：ヤップ・ソッキ / 共同製作・マネージメント：インディア・ファウンデーション・フォー・アーツ、アーティシヤクティ、タン・フクエン / 東京公演スタッフ 技術監督：佐藤 豪 / 技術監督アシスタント：加藤由紀子 / 舞台監督：野島 結 / 演出部：ソム・ヘイン / 照明コーディネーター：斉藤嘉和、森下 泰 (以上、有限会社ライトシップ) / 音響コーディネーター：宮崎淳子 (有限会社サウンドウィーズ) / 通訳：河井麻祐子 / 記録写真：青木 司 / 記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」 / 後援：インド大使館 / 主催：フェスティバルトリキョウ、ゴージャル・スジャータ

"Dancing Girl" explores the theme of the self. In this work, the performer reconstructs a fictional character of the self. In a clinical fashion, the performer deconstructs her physical and psychological behaviour, using a hyper-stylized movement language. Over the course of the piece, the image morphs from the image of a broken doll, to a beautiful doll, to a dancing doll, to a lonely doll, until finally, the image disappears, returning to a dormant, invisible state. Ultimately, the piece is the performer's attempt to step outside of her body and confront the image of herself.

Sujata Goel

Sujata Goel: Choreographer, Dancer [India]

Born in 1979 in America. She has studied both contemporary dance and traditional Indian Bharatanatyam dance. After graduating from university in India in 2001 she worked under choreographer Padmini Chettur in Chennai. Following this she studied contemporary dance in Brussels, taking part in studio residencies in Europe. She created "Dancing Girl" from 2010-2012 as the result of grant support.

Choreography, Cast: Sujata Goel / Costumes: Tabasheer Zutshi / Lighting: Seok Hui Yap / Co-production and Management: India Foundation for the Arts, Adishakti, Tang Fu Kuen / Tokyo Performance Staff Technical Manager: Go Sato / Technical Manager Assistant: Yukiko Kato / Stage Manager: Yui Nojima / Stage Assistant: Haein Song / Lighting Co-ordination: Yoshikazu Saito, Tai Morishita (All for LightShip Inc.) / Sound Co-ordination: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.) / Interpretation: Mayuko Kawai / Photography: Tsukasa Aoki / Video: SAKKODO Co., Ltd. / Endorsed by Embassy of India / Presented by Festival/ Tokyo, Sujata Goel



ギター抱えて。あふれ出す「ことば」と「うた」の時間
Take up a guitar. Song and language burst out.

たのもしいむすめ /
構成：柴田聡子
A Promising Daughter /
Concept: Satoko Shibata

© Kentaro Minoura

11.26 (Tue) - 11.27 (Wed) アサヒ・アートスクエア
Asahi Art Square

私の興味のすべては、自分の行動・思考のすべては誰かからの借り物で、その中で、歌う瞬間のみ、その感覚が薄れる、そういう風に思っている自分を違う視点が監視していて、いたちごっこである、ということです。今回の作品が、それを考えられるひとつの材料になればいいと思います。

柴田聡子

柴田聡子：歌手【日本】

1986年札幌市生まれ。2010年より都内を中心にライブ活動を始める。11年、夏と冬に2枚のデモCDを発表。東京芸術大学大学院映像研究科2011年度修了制作展「MediaPractice11-12」のテーマソングにボーカルで参加。また12年には舞台「ボクの四谷怪談」（脚本・作詞：橋本治、演出：鏡川幸雄、音楽：鈴木慶一）のサウンドトラックにボーカリストとして参加している。12年6月、ファーストアルバム「しばたさとこ島」を浅草橋天才算数塾より発表。11月に同アルバムの10インチ・アナログレコードをなりすレコードより発売。

構成・出演：柴田聡子 / 舞台監督・音響・照明：宋基文 / アドバイザー：貝和由佳子 / 翻訳：姜 旻亨 / 記録：地主麻衣子、吉開菜央 / 共催：フェスティバルトーキョー / 主催：柴田聡子

All my interests, my actions and thoughts, are things borrowed from someone, where in this only at the moment of singing the sensation fades, playing a cat-and-mouse game and watching myself thinking in this way from a different perspective. I hope this performance becomes an ingredient for being able to consider this.

Satoko Shibata

Satoko Shibata: Singer [Japan]

Born in 1986 in Sapporo. She has been performing concerts in Tokyo since 2010, releasing two demo CDs in 2011. She has contributed to a graduation project at the Tokyo University of the Arts and a musical soundtrack. Her first album was released in June 2012.

Concept, Cast: Satoko Shibata / Stage Manager, Sound, Lighting: Motofumi Sou / Adviser: Yukako Kaiwa / Translation: Minhyung Kan / Archives: Maiko Jinushi, Nao Yoshigai / Co-presented by Festival/Tokyo / Presented by Satoko Shibata

関西演劇界の風雲児が贈る、渾身の社会派ミュージカル！

Frenetic state-of-the-nation musical from the Kansai fringe scene stars



HELLO HELL!!! / 劇団子供鉦人

作・演出：益山貴司

HELLO HELL!!! / KODOMOKYOJIN

Text, Direction: Takashi Masuyama

© Kiyoe Akechi

11.28 (Thu) - 12.2 (Mon) シアターグリーン BIG TREE THEATER
Theater Green

劇団子供鉦人の歌って踊る音楽劇の第4弾。「HELLO HELL」は地獄の合い言葉。地獄に堕ちた人々の永遠に繰り返される終わらない日常をブラックユーモアたっぷりに描き出します。そこには、現代に生きるわれわれの見るも無惨で馬鹿な姿がてんこ盛り！ 演劇は時代を映す鏡と呼ばれて久しいですが、この公演はその原点に立ち返り、歌と踊りという、演劇とともに何千年と人々に寄り添ってきた表現たちと一緒にアグレッシブな舞台をお届けします！

益山貴司

益山貴司：劇団子供鉦人主宰、劇作家、演出家、役者【日本】
1982年大阪生まれ。幼稚園の学芸会における「馬に乗る人」役で演劇デビュー。高校のクラブ活動から演劇活動を開始し、2005年に劇団子供鉦人を結成、全作品の作・演出を手がける。12年に、劇団子供鉦人としてフランス・リール地方の現代美術展lille3000に参加。個人でも、野田秀樹率いるNODA・MAPやラジオドラマへの出演、短編小説の連載など、多方面で活躍している。

作・演出：益山貴司 / 出演：益山寛司、キキ花香、影山徹、徳なつき、ミネユキ、BAB、小中大、太山貴司（以上、劇団子供鉦人）、花本ゆか、PIKA☆、益山 U☆G、クールキャッツ 高杉、小嶋海平、山本大樹、岡野一平、小林欣也、地道元春、永沼伊久也、藤澤賢明、東ゆうこ、松原進典、三ツ井 秋、山西竜矢、奥山タチ、グレルワ・タチュー、デグルネーニ、イガキアキコ（ヴァイオリン from “たゆたう”）、かんのとしこ（アコーディオン from “わをん”）、宮田あずみ（ベース from “かりきりん”）※○（数えきれない）、中井キララ（ギター from “オシシベンペンズ”）、三原智行（トロンボーン from “Green Parade”）、ワタナベ（ドラムス from “pato lol man”） / 舞台監督：伊達真悟、若旦那家康 / 音響：林裕介、河合宣彦 / 照明：筆谷亮也 / 振付：ミスター / 衣装：おどシスタ /ヘアメイク：Little Birds / スタイリング：生本寛子 / 美術：さくらの、谷口 悠 / 演出部：河井 朗、上川戦洋、黒住 高市草平 / フライヤーデザイン：さくらの、益山寛司 / WEB：こどちゃ（物販）：ミネユキ / 制作：佐々木瑞穂、中西由佳、河村真由美 / 写真：明地清康、橋本大和 / 映像：竹崎博人 / 共催：フェスティバルトーカー / 主催：劇団子供鉦人

This is the fourth piece of musical theatre where KODOMOKYOJIN will be singing and dancing. "HELLO HELL" is a code word for hell. With black humor aplenty, it portrays the never-ending everyday of the people banished to the underworld. Theatre has long been called a mirror for reflecting the age, but this performance will return to that starting point, presenting an aggressive theatre work of song and dance as has been snuggling up close alongside drama and people for thousands of years!

Takashi Masuyama

Takashi Masuyama：Playwright, Director, Actor,
Leader of KODOMOKYOJIN (Japan)
Born in 1982 in Osaka. He formed KODOMOKYOJIN in 2005 and handles the writing and direction for all its productions. He took the company to Lille, France in 2012 for lille3000. He has also performed in radio plays and NODA・MAP productions, as well as being active as a short story writer.

Text, Direction: Takashi Masuyama / Cast: Kanji Masuyama, Hanaka Kiki, Toru Kageyama, Natsuki Oku, Yuki Mine, BAB, Tai Konaka, Takashi Masuyama (All for KODOMOKYOJIN), Yuka Hanamoto, PIKA☆, U☆G Masuyama, Cool Cats Takasugi, Kaihei Kojima, Hiroki Yamamoto, Ippei Okano, Kinya Kobayashi, Motoharu Jimichi, Ikuya Naganuma, Takaaki Fujisawa, Yugo Higashi, Shinsuke Matsubara, Aki Mitsui, Tatsuya Yamaniishi, Yuko Kureyama, Gregoire Tirtiaux, Degrutierri, Akiko Igaki (Violin from "tayatuu"), Toshiko Kanno (Accordion), Azumi Miyata (Electric-bass from "karikiri" & "※○"), Kirara Nakabayashi (Guitar from "Oshiri Pen Penz"), Tomoyuki Mihara (Trombone from "Green Parade"), watanbe (Drums from "pato lol man") / Stage Managers: Shingo Date, Ieyasu Wakadana / Sound:Yusuke Hayashi, Nobuhiko Kawai / Lighting: Ryoa Fudetani / Choreography: Mister / Costumes: ODDSISTA / Hair & Make-Up: Little Birds / Stylist: Toko Ikumoto / Stage Design: Sakurano, Yu Taniguchi / Stage Assistants: Hogara Kawai, Takahiro Kamikawa, Hisao Kurozumi, Shohai Takaichi / Flyer Design: Sakurano, Kanji Masuyama / Website, Merchandise Design: Yuki Mine / Production Co-ordination: Mizuho Sasaki, Yuka Nanakishi, Mayumi Kawamura / Photography: Kiyoe Akechi, Yamato Hashimoto / Video: Hiroto Takezaki / Co-presented by Festival/Tokyo / Presented by KODOMOKYOJIN

かわいくって生々しい。新世代の女子が見た飼育、血統
Cute is graphic: A female artist's take on breeding and pedigree

いのちのちQ II / Q
作・演出：市原佐都子
The Qlobe of Life II / Q
Text, Direction: Satoko Ichihara

© Satoko Ichihara

11.29 (Fri) - 12.1 (Sun) アサヒ・アートスクエア
Asahi Art Square

ニンゲンに飼い慣らされている動物であるペットのイヌ、回転寿司バーをモチーフに、飼育、血統、異種交配のことを扱っています。そこからニンゲンもひとつの動物として見えてくることを狙います。いま引かれているなにかとなかを分ける線があやふやになってよくわからなくなりたいです。暗いけど、生命力に溢れた作品になるといいなと思っています。

市原佐都子

市原佐都子：劇作家、演出家 [日本]

1988年生まれ、福岡県北九州市出身。桜美林大学在学中、自身初となる作・演出作品「虫Q」を卒業研究として発表。卒業後、Qを始める。2011年、戯曲「虫」で第11回AAF戯曲賞優秀賞受賞。13年にTPAM in Yokohama 2013ショーケース参加作品として「いのちのちQ」を上演。また、Crackersboat主催 flat plat fesdesu Vol.2に「最新の私は最強の私」で参加。

作・演出：市原佐都子 / 出演：飯塚ゆかり、植田崇幸、柏原隆介、角 梓、坂口真由美、椎橋綾那、田中俊太郎、吉岡紗良 / 舞台監督：小川陽子 (空間企画) / 舞台美術：中村友美 / 照明：塚原佑梨 / 音響：柴田未来 / 衣装：桑原史香 / 宣伝美術：吉田聡子 / 映像：西川達郎、乙女絵美 (以上、みんなうそつき) / 字幕翻訳：矢部 基 / 制作：渡邊由佳梨、有上麻衣 / 共催：フェスティバルトーキョー / 主催：Q

The performance features motifs of pet dogs, an animal domesticated by humanity, and the conveyor belt sushi bar, and deals with breeding, pedigree and cross-fertilization. I aim to show humanity as an animal. The line separating these things now has become uncertain and we don't really understand it. Although it is dark, I hope the performance will be abundant in vitality.

Satoko Ichihara

Satoko Ichihara: Playwright, Director [Japan]

Born in 1988 in Fukuoka. She studied at J. F. Oberlin University and started her "Q" series after graduating. She won the 11th AAF Best Play Award for "Mushi" and in 2013, she staged "The Globe of Life" at TPAM 2013 Showcase.

Text, Direction: Satoko Ichihara / Cast: Yukari Iizuka, Takayuki Ueda, Kosuke Kashiwabara, Azusa Kado, Mayumi Sakaguchi, Ayana Shibashi, Shuntaro Tanaka, Sara Yoshioka / Stage Manager: Yoko Ogawa (kuukanikaku) / Stage Design: Tomomi Nakamura / Lighting: Yuri Tsukahara / Sound: Miku Shibata / Costumes: Fumika Kuwabara / Publicity Design: Satoko Yoshida / Video: Tatsuhiro Nishikawa, Emi Otome (All for minnausotsuki) / Translation, Surtitles: Motoi Yabe / Production Co-ordination: Yukari Watanabe, Mai Ariue / Co-presented by Festival/Tokyo / Presented by Q

台湾のマルチクリエイター×ジャパニーズ・ホラーの邂逅
Taiwanese experimental theatre meets Japanese horror cinema

真夏の奇譚集 / シャインハウス・シアター
作・演出：ジョン・ボーユエン
A Midsummer Night's Chat / Shinehouse Theatre
Text, Direction: Poyuan Chung

© Shinehouse Theatre

11.29 (Fri) - 12.1 (Sun) シアターグリーン BASE THEATER
Theater Green

『真夏の奇譚集』は個人の実体験をもとにした、さまざまな物語から構成されています。それらの物語は、常に「奇譚」を生み出すのに役割を果たしてきた、世代や歴史の変化による闇から生まれてきました。中国の元の時代にも、亡霊を用いて官僚政治の腐敗を描いた歌劇があります。幽霊にまつわる多くの舞台作品では、幽霊よりも人間の方がはっきりとした存在として描かれます。西洋では、幽霊はハムレットの父の亡霊でもよく知られるように、シェイクスピア作品にもしばしば登場します。洋の東西を問わず、幽霊とは、人々が対峙しているエゴや環境、内なる自己を表象し、後悔と欲望を満たしてくれる存在なのではないでしょうか。

ジョン・ボーユエン

"A Midsummer Night's Chat" has been adapted from many stories of personal experiences. These stories spring from an ambiguous darkness, such as that from generational and historical changes where mysterious anecdotes always play a part. Dou E Yuan reflects the corruption of contemporary bureaucracy through the revelation of ghosts. Many plays about ghosts also show that humanity is not as articulate as specters. In the West, illusory specters are often seen in Shakespeare's plays, most famously the ghost of Hamlet's father. From the East to the West, the ghost seems an outlet for people's conflicts with their ego, environment, and inner self, allowing people to make up or gratify their regret and desire.

Poyuan Chung

ジョン・ボーユエン：劇作家、演出家 [台湾]

1985年台湾生まれ。国立台北芸術大学で演出を学ぶ。2006年にシャインハウス・シアターを旗揚げし、現在までに20以上のオリジナル作品を創作している。11年に『真夏の奇譚集』が台新芸術賞にノミネート。創作活動だけでなく、大学で演劇の講師をするなど、台湾の芸術教育にも貢献。演劇作品のほか、アニメ作品の脚本も手がける。また、俳優として、広告、テレビ、映画などでも活躍している。

作・演出：ジョン・ボーユエン / 出演：グー・ヨンイエン、ゾン・ペイ、チェン・ユーチン、チェン・シン、グオ・ユンティン / 舞台デザイン：ジョン・ボーユエン / 照明デザイン：チェン・マンシュアン / 演出助手：ワン・ツァーチェン / プロデューサー：イェン・ユリン / 制作：リン・ジアン / 東京公演スタッフ 技術監督：佐藤 泰 / 技術監督アシスタント：加藤由紀子 / 舞台監督：倉科史典 / 演出部：種原絵美 / 照明コーディネーター：湖山和弘、森下 泰 (有限会社ライトシップ) / 音響コーディネーター：宮崎淳子 (有限会社サウンドウィーズ) / 音響：新井のどか / 字幕：横尾優美子 / 通訳：栗田敦子 / 記録写真：青木 司 / 記録映像：株式会社彩高堂 [西池袋映像] / 主催：フェスティバルトーキョー、シャインハウス・シアター

Poyuan Chung: Playwright, Director [Taiwan]

Born in Taiwan in 1985. He formed Shinehouse Theatre in 2006 and has created over twenty original productions. He also writes scripts for anime and is active as an actor in advertising, television and cinema.

Text, Direction: Poyuan Chung / Cast: Yungyen Ku, Pei Tzeng, Yuching Chen, Hsin Chen, Yunting Kuo / Stage Design: Poyuan Chung / Lighting: Manshuan Chen / Direction Assistant: Tzuchien Wang / Producer: Yulan Yeh / Production Co-ordinator: Chianan Lin / Tokyo Performance Staff Technical Manager: Go Sato / Technical Manager Assistant: Yukiko Kato / Stage Manager: Kurashina Fuminori / Stage Assistant: Emi Shinohara / Lighting Co-ordination: Kazuhiko Yuyama, Tai Morishita (Light Ship Inc.) / Sound Co-ordination: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.) / Sound: Nodoka Arai / Surtitles: Yumiko Yokoo / Interpretation: Atsuko Kurita / Photography: Tsukasa Aoki / Video: SAIKODO Co.,Ltd / Presented by Festival/Tokyo, Shinehouse Theatre

多角的な視点、手法で舞踊と音楽の始原に触れる多元芸術

Dawon crossover arts searching for the roots of dance and music

地の神は不完全に現れる /

構成・振付：ソ・ヨンラン

The God of Earth Comes Up Imperfectly /

Concept, Choreography: Yeongran Suh



11.30 (Sat) - 12.1 (Sun) シアターグリーン BOX in BOX THEATER
Theater Green

『地の神は不完全に現れる』は、劇場の舞台から切り離された野性的な舞踊や音楽を発見する旅です。私たちの日常にある、それらの舞踊や音楽の太いなる可能性を見いだすため、私たちは作品を創作しました。

ソ・ヨンラン

ソ・ヨンラン：振付家、パフォーマー、多元芸術アーティスト[韓国]
梨花女子大学校で舞踊学を専攻。韓国芸術総合学校の舞踊創作科修士課程を卒業し、2008年より個人での創作活動をはじめ。モンゴルやオーストリアなど、国内外でレジデンシープログラムに参加。子供向けのワークショップも積極的に行っている。12年には「I confess my faith」、13年には『地の神は不完全に現れる』で韓国のフェスティバル・ボムに参加。

構成・振付・出演：ソ・ヨンラン / 出演：イ・サンア / リサーチ：ソ・ヨンラン、ノ・ユンシル / 字幕：キム・ボラ / 照明：ジュン・ドンガク / 音響：ユ・テソン / 衣裳：イム・ヨンゴク / 英語翻訳：ソ・ジェイオン / 映像：ウ・ソンチャン / 写真：オク・サンホン / リサーチ協力：モンゴル・ノマディック・レジデンス、コリアン・アートカウンスिल、アートスペースDon Quixote、Theater of Sand exhibition / 製作協力：ムルレ・アートスペース、ソウル文化財団 (SFAC) / 東京公演スタッフ 技術監督：佐藤 豪 / 技術監督アシスタント：加藤由紀子 / 舞台監督：野島 結 / 演出部：木下早紀、ソン・ヘイン / 照明コーディネーター：山本周平、森下 泰 (以上、有限会社ライトシップ) / 音響コーディネーター：宮崎淳子 (有限会社サウンドウィーズ) / 翻訳：洪 明花 / 通訳：河井麻祐子 / 記録写真：青木 司 / 記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」 / 後援：駐日韓国大使館 韓国文化院 / 主催：フェスティバル/トーキョー、ソ・ヨンラン

キーワード

【バンソリ】…歌い手と鼓手(太鼓を打つ)の二人によって、物語を歌いながら語られる韓国の伝統芸能の一種。

【クツ】…シャーマンの祭儀。クツを主宰する司祭を巫堂(ムーダン)という。

This performance presents the journey of our team to discover wild types of dance and sound which have been cut out of the theatre stage. We have made this performance out of the broad possibilities of these wild types of dance and sound that exist all around us in daily life.

Yeongran Suh

Yeongran Suh: Choreographer, Performer [Korea]
Dawon (crossover) artist. She has been working as a solo artist since 2008, and has participated in residencies in Mongolia and Austria. She conducts workshops for children and has taken part in Festival Bo:m in both 2012 with "I confess my faith" and in 2013 with "The God of Earth Comes Up Imperfectly".

Concept, Choreography, Cast: Yeongran Suh / Cast: Sangah Lee / Research: Yeongran Suh, Eunsil Noh / Surtitles: Bora Kim / Lighting: Donguk Jung / Sound: Taesun Yoo / Costumes: Yeongok Lim / Translation: Jooyeon Jung / Video: Seungchan Woo / Photography: Sanghoon Ok / Research Support: Mongol Nomadic Residence, Korean Art Council, Art space Don Quixote, "Theater of Sand" exhibition / Production Support: Mulla Art Space, SFAC / Tokyo Performance Staff Technical Manager: Go Sato / Technical Manager Assistant: Yukiko Kato / Stage Manager: Yui Nojima / Stage Assistants: Saki Kinoshita, Haein Song / Lighting Co-ordination: Shuhei Yamamoto, Tai Morishita (All for Light Ship Inc.) / Sound Co-ordination: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.) / Translation: Myunghwa Hong / Interpretation: Mayuko Kawai / Photography: Tsukasa Aoki / Video: SAIKODO Co., Ltd. / Endorsed by Embassy of the Republic of Korea in Japan / Presented by Festival/Tokyo, Yeongran Suh

身体と言葉の断裂、反射に見出される「冒険物語」のカタチ
An adventure story found among the rifts of body and language

野良猫の首輪 / sons wo:
作・演出：カゲヤマ気象台
Stray's Collar / sons wo:
Text, Direction: Kishodai Kageyama

12.4 (Wed) - 12.7 (Sat) シアターグリーン BOX in BOX THEATER
Theater Green

故郷についての演劇をやります。故郷のようなものはどこかに存在していて、実際に移動しなければ帰ることはできないのだけれど、しかし、わたしは今この場所において、他の場所に移動するのは未来においてしかできないから、結局、実際にその故郷がどこにあるのかは問題にしないまま、ここから見える世界を見回していくことしかできない。その、ふとした意識の飛躍で忘れられたり思い出されたりする世界に、飽きることなく立ち続けるような演劇をやる予定です。

カゲヤマ気象台

カゲヤマ気象台：劇作家、演出家、sons wo:主宰【日本】
1988年静岡県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。2008年にsons wo:を設立、主に脚本、演出、音響デザインを手がける。発話と身体連続性を排除した「機械仕掛けのシアター」を構築しながら、そこで起こる現象にあくまでもひとりで対峙できるような「開かれた自己内省のための場」としての演劇空間を追求している。演劇のほか、TOLTA、サンズイなど、現代詩ユニットの活動にも参加。13年に芸創CONNECT Vol.6最優秀賞受賞。

作・演出：カゲヤマ気象台 / 出演：菊川恵生佳、椎谷万里江(拘束ビエロ)、杉 亜由子、大石英史、峰松智弘(劇団百日紅御一行様)、一川幸恵、八木光太郎、小野紗知 / 舞台監督：伊藤智史 / 美術：小田原のどか / 照明：みなみあかり / 音響：カゲヤマ気象台 / 衣装：金藤みなみ(Nichecraft) / フライヤーデザイン：垣本朋絵(滋コミ デザイン部) / イラスト：チャナ / 演出助手：森田和人(劇団森) / 翻訳：anico / 制作：飯塚なな子 / 共催：フェスティバルトーカー / 主催：sons wo:

The performance is about the hometown. The hometown exists somewhere and you cannot return there without actually moving, but because we are now in this place and can only move to another place in the future, ultimately we can only look around at the world that we can see from here, without making a dilemma out of where that hometown actually is. The performance will remain always in this world of random flights of remembering and forgetting.

Kishodai Kageyama

Kishodai Kageyama: Playwright, Director,
Leader of sons wo: [Japan]
Born in Shizuoka in 1988 and graduated from Waseda University. He formed sons wo: in 2008 and handles the script-writing, direction and sound design. He won Best Play at the Geisou CONNECT Vol. 6 showcase.

Concept, Direction: Kishodai Kageyama / Cast: Erika Kikukawa, Marie Shiya (clown in chain), Ayuko Sugi, Eiji Oishi, Tomohiro Minematsu (Saruberi Goiko), Sachie Ichikawa, Kotarou Yagi, Sachi Ono / Stage Manager: Satoishi Ito / Stage Design: Nodoka Odawara / Lightning: Akari Minami / Sound: Kishodai Kageyama / Costumes: Minami Kinto (Nichecraft) / Publicity Design: Tomoe Kakimoto (Gekicomi Design Division) / Illustration: Chana / Assistant Direction: Kazuto Morita (Gekidan Shin) / Translation: anico / Production Co-ordination: Nanako Iizuka / Co-presented by Festival/Tokyo / Presented by sons wo:

人と都市、記憶をめぐるデジタル・ビジュアルシアター
A digital exploration of humanity, cities and memory

クラウド /

構成・演出：タン・タラ

CLOUD /

Concept, Direction: Tara Tan



© Tara Tan

12.5 (Thu) - 12.7 (Sat)

シアターグリーン BASE THEATER
Theater Green

『クラウド』は、私たちがどのように物事を記憶するのか、そして物事を忘れる過程で何を失うのかの考察です。フィルムのレンズ、ライブ・パフォーマンス、心を揺さぶるサウンドスケープ、そしてTwitterのフィードを通して、記憶とは何か—フィルムが物事を記録し永遠に伝えること、ライブシアターの儚さ、デジタル・テクノロジーに絶え間なく刻まれるログ—を探ります。本作は舞台作品ですが、ありきたりな演劇や映画とは違います。むしろ、視覚的な短編詩のモンタージュであり、それぞれのメディアを覆すための作品です。これはみなさんへの招待状。さあ、はじめます。

タン・タラ

タン・タラ：インタラクションデザイナー [シンガポール]

2007年より創作活動を開始。ブリストル大学で演劇を学び、現在はハーバード大学大学院でデザインとテクノロジーを研究中。多様なメディアを用い、芸術とテクノロジー、身体とデジタルメディアを横断する作品を創作している。10年には短編映像作品が上海万博のほか、シンガポールやロンドン、オーストラリアなどで上映。12年には『Songbird』がシンガポールアートフェスティバルで上演された。

構成・演出：タン・タラ / 映像製作：エオ・クリス / 映像撮影：ルイ・ワンビン / 映像編集：チェオ・レオン / 映像音楽：テオ・ウェイ・ヨン / 音楽：Riot In Magenta / 舞台美術：ドナルド・アップ / 照明：ベク・ジャンナビエブ / 制作：リュウ・ヨンフエイ / 舞台監督：セン・ライアン・オスニール / 制作補佐：タン・イティン / マルチメディア・オペレーター：ジャム・リア / 出演：503: 北川 麗、ウェンディー・ジン・シャオ、マイケル・シ・ジュニー、ジャック・ネオ・トレヴァリン、弁理士：リー・ラミー / 東京公演スタッフ 技術監督：佐藤 泰 / 技術監督アシスタント：加藤由紀子 / 舞台監督：野島 結 / 演出部：篠原絵美 / 照明コーディネーター：芥川久美子、森下 泰 (以上、有株式会社ライトシップ) / 音響コーディネーター：宮崎 淳子 (有株式会社サウンドウィーズ) / 翻訳：住吉梨紗 / 通訳：河井麻祐子 / 記録写真：青木 司 / 記録映像：株式会社彩高堂 [西池袋映像] / 後援：駐日シンガポール共和国大使館 / 主催：フェスティバルトーカー、タン・タラ

"CLOUD" examines the ways we remember and what we lose in the ways we forget. It looks through the lens of film, live performance, evocative soundscapes and Twitter feeds to investigate the theme of memory — the way film records and immortalizes, the fleetingness of live theatre, the incessant logging that comes with digital technology. "CLOUD" doesn't play out like a conventional play or film, even though it is staged in such settings. Think of it, instead, as a montage of short visual poems, subverting each medium. This is an invitation — let's play.

Tara Tan

Tara Tan: Interaction Designer [Singapore]

Studied theatre at University of Bristol and is currently pursuing a Master's Degree in Design and Technology at Harvard Graduate School of Design. She has been creating work since 2007, focusing on projects that use diverse media, and traversing technology and the arts, the physical and the digital. "Songbird" was screened at the Singapore Arts Festival in 2012, while her short film work was shown at the Shanghai World Expo in 2010, followed by in Singapore, London and Australia.

Concept, Direction: Tara Tan / Film Producer: Chris Yeo / Film Cinematography: Wan Ping Loi / Film Editor: Leon Cheo / Film Composer: Wei Yong Teo / Music: Riot In Magenta / Stage Design: Luat Duong / Lighting: Genevieve Peck / Production Manager: Yong Huay Liu / Stage Manager: Ryann Othniel Seng / Assistant Production Manager: Yi Ting Tan / Multimedia Operator: Leah Sim / Cast 503: Rei Kitagawa, Wendy: Xiao Jing, Michael: Johnny Ng, Jack: Trevalyn Neo, Legal: Laremy Lee / Tokyo Performance Staff Technical Manager: Go Sato / Technical Manager Assistant: Yukiko Kato / Stage Manager: Yui Nojima / Stage Assistant: Emi Shinohara / Lighting Co-ordination: Kumiko Akutagawa, Tai Morishita (All for Light Ship Inc.) / Sound Co-ordination: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.) / Translation: Lisa Sumiyoshi / Interpretation: Mayuko Kawai / Photography: Tsukasa Aoki / Video: SAIKODO Co., Ltd. / Endorsed by Embassy of the Republic of Singapore / Presented by Festival/Tokyo, Tara Tan



プロパガンダ
ネタは60年代の啓蒙映画。中国実験演劇の進化形
 A 1960's propaganda film evolves into the present

しんでん
地雷戦 2.0 / 薪伝実験劇団
 作・演出：ワン・チョン

The Warfare of Landmine 2.0 / Théâtre du Rêve Expérimental
 Text, Direction: Chong Wang

12.5 (Thu) - 12.7 (Sat) シアターグリーン BIG TREE THEATER
 Theater Green

テーマは日本人である、あなたたちです。中国のプロパガンダ映画ではどう描かれているのでしょうか？ テーマは中国人である、わたしたちです。あなたたちのことをどういう風に想像していたのでしょうか？ テーマは、かつてあなたたちとわたしたちを引き離し、生死を分けた地雷です。わたしが本作で語ることはありません。なぜなら全てのことは、日本人、中国人、地雷、エンゲルス、福澤諭吉、ユング、アインシュタイン、ビンラディン、そして江戸川コナンが表現してきたものだからです。

ワン・チョン

ワン・チョン：劇作家、演出家、薪伝実験劇団主宰 [中国]

1982年北京生まれ。北京大学で経済と法律を学び、ハワイ大学で演劇を研究し修士号を取得。2008年北京にて薪伝実験劇団を設立。マルチメディアパフォーマンスやドキュメンタリー演劇を創作、中国の実験演劇界を牽引している。アジア各地やヨーロッパで公演を行うなど、国外でも積極的に活動。12年には利賀村で開催されたアジア演出家フェスティバルにも参加。戯曲や書籍、劇評の翻訳なども行っている。

作・演出：ワン・チョン / 出演：マー・ジュオ、ワン・ヨウ、ユー・ティエンジエン、リー・ジアロシ、リー・ポーリン、リウ・シアデン / 技術監督：リアン・アンジョン / 作曲・演奏：リー・ヤンファン / 演出助手：ヤン・ファン / 制作：タン・シャオワイ / 東京公演スタッフ 技術監督：佐藤 豪 / 技術監督アシスタント：加藤由紀子 / 舞台監督：倉科史典 / 演出部：木下早紀 / 照明コーディネーター：湯山和弘、森下 泰 (有限会社ライトシップ) / 音響コーディネーター：宮崎淳子 (有限会社サウンドウィーズ) / 字幕：横尾優美子 / 通訳：山田規古 / 記録写真：青木 司 / 記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」 / 主催：フェスティバル/トーキョー、薪伝実験劇団

キーワード

【地雷戦】…実際にあったゲリラ戦をもとに、1962年に中国で製作された映画のタイトル。TVドラマ化もされており、2000年代に入ってもなお、繰り返し放映されている。

The theme is you, the Japanese people. How are you represented in Chinese propaganda films? The theme is us, the Chinese people. How did we imagine you? The theme is them, the landmines used to divide us from you, the dead from the alive. I have nothing to say in the performance, because everything has been expressed by the Japanese, the Chinese, the landmines, Friedrich Engels, Yukichi Fukuzawa, Carl Jung, Albert Einstein, Osama bin Laden, and Conan Edogawa.

Chong Wang

Chong Wang: Playwright, Director, Leader of Théâtre du Rêve Expérimental [China]

Born in 1982 in Beijing. After studying in Beijing, he completed his master's degree in theatre at the University of Hawai'i. He formed Théâtre du Rêve Expérimental in 2008. Its multi-media performance and documentary theatre has made it a leader of experimental theatre in China. He has toured internationally, including in Asia and Europe. He took part in the Asian Directors' Festival in Toga (Japan) in 2012. He is also a writer and translator.

Text, Direction: Chong Wang / Cast: Zhuo Ma, You Wang, Tianjan Yu, Jialong Li, Bolin Li, Xiaqing Liu / Technical Director: Anzheng Liang / Musician: Yangfan Li / Direction Assistant: Fan Yang / Production Co-ordination: Xiaohui Tang / Tokyo Performance Staff Technical Manager: Go Sato / Technical Manager Assistant: Yukiko Kato / Stage Manager: Fuminori Kurashina / Stage Assistant: Saki Kinoshita / Lighting Co-ordination: Kazuhiro Yuyama, Tai Morishita (Light Ship Inc.) / Sound Co-ordination: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.) / Surtitles: Yumiko Yokoo / Interpretation: Noriko Yamada / Photography: Tsukasa Aoki / Video: SAIKODO Co., Ltd. / Presented by Festival/Tokyo, Théâtre du Rêve Expérimental

F/Tアワード F/T Award

F/T13公募プログラムの参加作品を対象とし、受賞者には来年度の主催プログラムとして創作・発表の権利を約束するF/Tアワード。創作視点の異なる作品を1つの評価基準で審査することによって、個々のアーティストの方法論や、同時代の表現に対する意識がますます高まることを期待しています。審査結果はF/T13の閉幕日でもある12月8日(日)に発表されます。

The F/T Award will be given to one of the participating productions in the F/T13 Emerging Artists Program, along with the promise of a commission for a new work to be presented at the following year's F/T Main Program. Although all coming from different creative contexts, the works will be appraised to the same single set of criteria, hoping to enhance the methodologies of individual artists and awareness of contemporary artistic expression. The result will be announced on the final day of F/T13, December 8th.

船屋法水：演出家・美術家

1961年生まれ。状況劇場を経て、東京グランギニョル、M.M.M.を結成。90年代は美術家として活動するも、95年のベネチア・ビエンナーレ参加後は作家活動を停止。2005年「バングント」展で美術活動を、07年「転校生」(F/T09春で再演)の演出で演劇活動を再開。近年の活動には、国東半島アートプロジェクト2012への参加、13年「ブルーシート」の演出がある。F/Tには、09春・秋、10、11に参加。

鴻 英良：演劇批評家

1948年生まれ。専門はロシア芸術思想。ウォーカー・アート・センター・グローバル委員、国際演劇祭ラオロン芸術監督、舞台芸術研究センター副所長を歴任。著書に『二十世紀劇場—歴史としての芸術と世界』、共著に『反響マシーン—リチャード・フォアマンの世界』他、訳書にカントール『芸術家よ、くたばれ!』、タルコフスキー『映像のボエジア』など多数。『シアターアーツ』第一期編集代表、『舞台芸術』(1~10号)編集委員。

シュテファニー・カープ：ドラマトウルク

ベルリンで文学博士号を取得後、ドラマトウルクとして、デュッセルドルフ劇場、バーゼル劇場などで活動。チューリヒ劇場のチーフ・ドラマトウルク兼共同監督(2000-04年)、フォルクスビューネのチーフ・ドラマトウルク(05-07年)、ウィーン芸術週間の演劇部門監督(04年7月-05年6月、07年8月-13年6月)を歴任。このほか、制作担当ドラマトウルクとして、主にクリストフ・マルターラーとの仕事に従事。

森山直人：演劇批評家

1968年生まれ。京都造形芸術大学舞台芸術学教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員、機関誌『舞台芸術』編集委員。KYOTO EXPERIMENT(京都国際舞台芸術祭)2013実行委員長。著書に『舞台芸術への招待』(共著、放送大学教育振興会)、主な論文に『沈黙劇とその対部—あるフィクションの起源をめぐって』、『ドキュメンタリー』が切り開く『舞台』など。

リー・イーナン：ドラマトウルク

1972年北京生まれ。中央戯劇学院演劇学准教授。北京大学卒業後、コロンビア大学にて演劇学を学ぶ。07年博士課程取得。06年以降、ミュンヘン大学、フランクフルト大学、中央戯劇学院(北京)で演劇とドラマトウルクの教鞭をとる。09年国際シンポジウム『北京におけるドラマトウルク』を企画。ドイツで習得したドラマトウルクのコンセプトや手法の普及に努める。『ポストドラマ演劇』を中国語翻訳。

Norimizu Ameya: Director, Artist

Born in 1961, he worked in theatre until 1990, after which he was a visual artist with a focus on the theme of the human body. He exhibited at the Venice Biennale in 1995, and then returned to theatre with "Transfer Student" (2007, revived at F/T09 Spring). He has directed work for F/T four times.

Hiddenaga Otori: Theatre Critic

He has held positions at the Walker Art Center, as director of the Laokoon International Theatre Festival, and as vice-president of Kyoto Performing Arts Center. His many writings include "Reverberation Machines: The World of Richard Foreman".

Stefanie Carp: Dramaturge

Leading dramaturge in the German-speaking theatre. She was in charge of theatre for the Wiener Festwochen from 2004-2005, and again from 2007-2013. Her long career has included much work with director Christoph Marthaler.

Naoto Moriyama: Theatre Critic

Lecturer at Kyoto University of Art and Design's Department of Performing Arts, and chief researcher at the university's Kyoto Performing Arts Center, editing its journal, Performing Arts. Head of the executive committee for KYOTO EXPERIMENT (Kyoto International Performing Arts Festival) 2013.

Yinan Li: Dramaturge

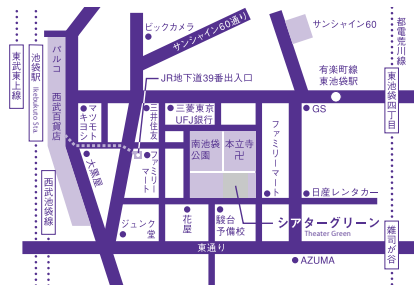
Born in Beijing in 1972. She has studied at Columbia University, Hamburg and Munich. In 2009 she curated the international symposium/workshop Dramaturgy in Beijing (together with the Goethe-Institut China) and has been a pioneer in German-style dramaturgy in China.

F/T13 [公募プログラム] 公演カレンダー

フェスティバル/トーキョー

演目名 Title	アーティスト Artist
『ダンシング・ガール』 “Dancing Girl”	振付：ゴージャル・スジャータ Choreography: Sujata Goel
『たのもしいむすめ』 “A Promising Daughter”	構成：柴田聡子 Concept: Satoko Shibata
『HELLO HELL!!!』 “HELLO HELL!!!”	劇団子供鉦人 作・演出：益山貴司 KODOMOKYOJIN Text, Direction: Takashi Masuyama
『いのちのちQⅡ』 “The Qlobe of Life II”	Q 作・演出：市原佐都子 Q Text, Direction: Satoko Ichihara
『真夏の奇譚集』 “A Midsummer Night’s Chat”	シャインハウス・シアター 作・演出：ジョン・ボーユエン Shinehouse Theatre Text, Direction: Poyuan Chung
『地の神は不完全に現れる』 “The God of Earth Comes Up Imperfectly”	構成・振付：ソ・ヨンラン Concept, Choreography: Yeongran Suh
『野良猫の首輪』 “Stray’s Collar”	sons wo: 作・演出：カゲヤマ気象台 sons wo: Text, Direction: Kishodai Kageyama
『クラウド』 “CLOUD”	構成・演出：タン・タラ Concept, Direction: Tara Tan
『地雷戦 2.0』 “The Warfare of Landmine 2.0”	新伝実験劇団 作・演出：ワン・チョン Théâtre du Rêve Experimental Text, Direction: Chong Wang

A シアターグリーン Theater Green



東京都豊島区南池袋2-20-4

TEL: 03-3983-0644

JRほか「池袋駅」東口より徒歩6分。東京メトロ有楽町線「東池袋駅」徒歩5分。都電荒川線「雑司が谷」徒歩7分

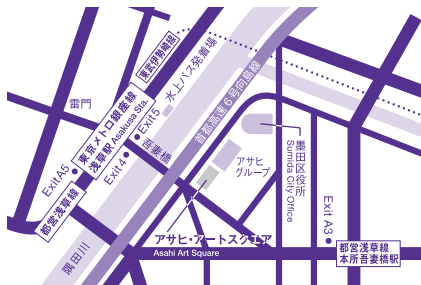
2-20-4 Minami-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo

Tel: 03-3983-0644

6 minutes' walk from east exit of JR Ikebukuro Station.
5 minutes' walk from Higashi-Ikebukuro Station on Tokyo Metro Yurakucho Line.

7 minutes' walk from Zoshigaya Station on Toden Arakawa Line.

B アサヒ・アートスクエア Asahi Art Square



東京都墨田区吾妻橋1-23-1 スーパードライホール 4F

TEL: 090-9118-5171

東京メトロ銀座線「浅草駅」4、5番出口より徒歩5分。都営浅草線「浅草駅」A5番出口より徒歩10分。「本所吾妻橋駅」A3出口より徒歩6分。東武伊勢崎線「浅草駅」より徒歩6分

4F Super Dry Hall

1-23-1 Azumabashi, Sumida-ku, Tokyo

Tel: 090-9118-5171

5 minutes' walk from exit 4 or 5 of Asakusa Station on Tokyo Metro Ginza Line. 10 minutes' walk from exit A5 of Asakusa Station on Toei Asakusa Line.

11.26 Tue	11.27 Wed	11.28 Thu	11.29 Fri	11.30 Sat	12.1 Sun	12.2 Mon	12.3 Tue	12.4 Wed	12.5 Thu	12.6 Fri	12.7 Sat	12.8 Sun	会場 Venue
17:00	14:00★ 19:30												A
19:30	17:00												B
		19:30	19:30	14:00 19:00	14:00★ 終了後 イベントあり	11:30 15:30							A
			19:30	14:00 19:30	14:00								B
			20:00	18:00★	15:00								A
				20:00	13:00★ 17:30								A
								19:30	☆14:00 ☆19:30	19:30	12:00 ☆15:30 19:00		A
									19:00★	20:00	14:00 17:00		A
									19:30	17:00★	14:00		A

F/T
ア
フ
ワ
ー
ド
決
定
!

☆=開演前プレ・パフォーマンストークあり Pre-performance talk
★=終演後ポスト・パフォーマンストークあり Post-performance talk

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也

制作：河合千佳、喜友名織江、滝沢麻衣、板橋園恵

コーディネート/通訳・翻訳(中国語)：小山ひとみ

プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム(YAMP)：

稲垣美実、崔 瀟、谷川仁美

協力：アサヒ・アートスクエア、

早稲田大学 新しい演劇人(ドラマトウルク)養成プログラム

宣伝協力：有限会社ネビュラエクストラサポート

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda

Production Co-ordinators: Chika Kawai, Orié Kiyuna, Mai Takizawa,

Sonoe Itabashi

Co-ordination / Interpretation, Translation: Hitomi Oyama

Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP) :

Mimi Inagaki, Xiao Cui, Hitomi Tanikawa

In co-operation with Asahi Art Square, Training Program in Dramaturgy,

Waseda University

PR Support: Nevula Extra Support Co., Ltd

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
樋川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社社会堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務総務課長
法務アドバイザー	福井和幸	北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋まみ、戸田史子

公募プログラムコーディネート

メディア戦略・広報	小山ひとみ
メディア戦略・広報アシスタント	松本花音
オープン・プログラム	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラムアシスタント	藤井さゆり
票券	田野入涼子、後藤天
票券アシスタント	長原理江
チケットセンター	常澤淳、伊指敏
総務	佐々木由美子、佐藤久美子
経理	葦原円花、一色壽好
	堤久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント	寅川英司
照明コーディネーター	河野千鶴
音響コーディネーター	佐々木真真子 (株式会社ファクター) 相川晶 (有限会社サウンドーズ)

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松佑介 (株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、
チャコト株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潟、CINRA.NET、美術手帳
ホテルパートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、
カラオケ店池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ホステス・ハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、
崔 瀟、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、吉川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T/ML：青木まな絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、館森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、
岡本静華、小野寺あす子、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環美、川島佳子、桐谷佳美、工藤咲咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤
利央子、崎濱梨枝、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、常島楓子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木朋子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、高田信隆、高橋 類、高松童子、蓮川向子、竹之内さやか、竹之内薫子、
田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼詔尊、戸塚 碧、藤田知子、ドラクサンズ、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤田 暁、藤林まきら、ブリット、コナー、
古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美帆、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田満子、和田幸子、渡邊早紀ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fujii
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogo
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon
Ticket Center: Yukiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kuno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (ofwork Inc.)
Public Relations: Masako Arita, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.
Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO, TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Caccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Blixtu Tacho
Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro
Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr
PR Support: Poster Haru's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)
Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013